

様式3 令和6年度 小金井市立 本町小 学校 自己評価まとめ								資料 5	
学校教育目標									
目指す学校像(ビジョン)									
【目指す学校像】 みんなが誇りに思う本町小									
【目指す児童・生徒像】 ◎強い子（しなやかで折れない心と立ち直る力をもち、積極的に人と関わりながら主体的に課題解決できる子） ◎やさしい子 ◎考える子 ◎はたらく子									
【目指す教師像】 ○子供の心に寄り添い、使命感をもって根気強く指導に取り組む教師 ○授業で勝負するプロフェッショナルとして、研究・研修に励む教師 ○組織、社会の一員として、自ら課題を見出し積極的に職務を遂行する教師									
前年度までの学校経営上の成果と課題									
「主体的」に焦点を当て、一人一台端末を活用しながら、授業変革を進めることができた。また、コミュニティ・スクールとして、保護者、地域と連携・協働し、児童の積極的に人と関わろうとする気持ちを高めることができた。認め、褒め、励ます指導を基本とし、自己肯定感を高めることを通して、しなやかで折れない心と立ち直る力を児童に育てていくことが課題である。									
	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		成果と次年度以降の対策		
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標			
授業変革の推進	発達段階に応じて、学習内容や学習する相手、学習するペース等を児童自身が選択できるような学習の開発に取り組む。	4	4	「児童の選択できる幅の広い複線型の授業づくり」に、積極的にチャレンジしている。意欲的に課題を追究する児童の姿が見られ、「全国学力・学習状況調査」でも、交流や課題解決に関する設問では、平均を上回る結果が出ており、手応えを感じている。児童にとって自由度が高い授業となるため、低・中学年については授業規律を整えることも意識しながら授業を行っていく。	4	4	児童アンケートの肯定的評価が93%、保護者アンケートの肯定的評価が90%と共に高い評価となっている。校内研究で「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業変革に取り組み、年6回の研究授業と全教職員の授業公開を行い、授業力の向上につながった。更に個に応じたきめ細やかな指導の充実を図り、基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させていく。		
	一人一台端末を活用し、児童が情報共有したり考えを深めたりするような活動を各教科で実施する。	3	4	児童が1日平均約1.3回一人1台端末を使用している。学習の共有や考えの交流等においてなくてはならない道具になりつつある。その良さを感じつつ、ノートやプリントを使い手で文字を書く場面とパソコンを使い文字入力する場面のバランスについて考えていく必要性も感じている。教員間で共通理解を図る時間を取り、今後も、より良い使用方法について模索していく。	3	4	ICT機器を活用した授業実践及び研修を通して、「個別最適な学び」、「協働的な学び」の充実を図った。児童アンケート「クロムブックを使って考えたり友達と交流したりする学習は楽しいですか」の最も肯定的な評価が昨年の69%から78%に増えている。ICT機器を日常的に活用する段階からデジタルを活用し、デジタル社会をよりよく生きる力を養うデジタルシチズンシップ教育を更に推進していく。		
	子ども	認め、褒め、励ます指導を徹底するとともに、児童の声や意見をよく聞き、教育活動に生かしていく。	4	4	児童の肯定的評価が9割を超えたが、「褒められ大切にされている」と感じていない児童が30人程度いる。今一度教職員で共通理解を図り、「認め、褒め、励ます指導」を徹底していく。「主体性」を重視し、様々な場面で児童の思いが反映されるような活動を行っており、「本町っ子の一日」の改訂や各委員会発信の新たな取組等につながった。引き続き、児童の声を聞き、児童と共に考えること大切にしていく。	4	4	読書集会やビンクシャツデー、リサイクル活動など委員会が中心となり主体的な活動に取り組んだ。児童アンケート「褒められ大切にされている」の肯定的評価が、中間に引き続き児童の肯定的評価が90%を超えた高い評価となっている。一方で「褒められ大切にされている」と感じていない児童は中間と同様である。引き続き、教職員で共通理解を図り、児童の心に届く言葉掛けや評価を適切に行っていく。	
子どもの権利の尊重	年3回のアンケートやWEB－QU等で実態をつかむとともに、ふれ合い月間を中心に全校でいじめ撲滅への取組を行う。	4	3	アンケートにおいて、「嫌なことをされず楽しく学校に通えている」と回答した児童が91%、「困ったとき、助けをもらいたいとき、周りに話せている」と回答した児童が85%であった。すべての児童が楽しく安心して通える学校を目指して、道徳の時間を中心に、互いを認め合い、温かく関われるような指導を継続するとともに、「認め、褒め、励ます指導」を徹底することで、児童が大人に相談しやすい環境を整えていく。	4	3	児童アンケートの「自分が困ったとき、助けをもらいたいとき、それをまわりの誰かに話せていますか」の否定的評価が18%（約5人に1人）いる。SOSの出し方の指導をするとともに、児童の心の声をキャッチする機会を定期的に設定していく。引き続き、すべての児童が楽しく安心して通える学校を目指して、道徳の時間を中心に、互いを認め合い、温かく関われるような指導を行っていく。1月の道徳授業地区公開講座では、児童の自己肯定感を高めるかわわりをテーマに保護者や地域の方と考える機会を設定する。		
地域連携の推進	近隣の大学や地域の人材、施設等と連携してゲストティーチャーを招聘し、専門性を生かした学習を行う。	3	4	6年生の森林教育、5年生の人権授業、4年生の福祉に関する学習、3年生の農業に関する学習、2年生の宮地楽器ホール見学等で、ゲストティーチャーの専門性を生かした学習を行った。今後も、生活科や総合的な学習の時間等において、児童の課題解決の意欲が高まるようなゲストティーチャーを招聘し、主体的な学習を充実させていく。	4	4	全学年が体験した「さかなクンと海のSDGs」、「こぶたのプーちゃん おはなし音楽会」、6年「美しい日本語の話し方教室」、5年「防災学習」、4年「インクルーシブ教育」、3年「消防署見学」、2年「オリンピック選手とのアクティブチャイルドプログラム」、1年「コマネチ」などゲストティーチャーの専門性を生かした学習を行った。特に今年度は都の施策である「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」の実施校となり、大変充実した交流活動を実践できた。引き続き地域や関係機関との連携を大切にし、充実させていく。		
	図書、芝生、学校生活支援、放課後子ども教室等の取組を地域学校協働活動に位置付け、活動を活性化させる。	4		地域との連携が進み、東京学芸大学と連携した学生ボランティアの募集や地域未来塾の拡充など、コミュニティ・スクールとしての取組が充実してきている。運動会や展覧会において、中学生のボランティアを募集する取組も新たに始まっている。来年は、開校60周年の年に当たるので、地域学校協働活動を充実させながら、周年行事の準備を保護者地域と連携して進めていく。	4	4	引き続き、東京学芸大学と連携した学生ボランティアの募集や地域未来塾の拡充など、コミュニティ・スクールとしての取組が充実してきている。学校生活支援では、児童の水泳学習の安全を支援する水泳ボランティアや外国籍の児童が学校生活や学習に取り組めるよう支援する外国語ボランティアなど、学校の状況に応じたボランティア活動も始まり、大変充実している。		
特色ある学校づくり	体力テストの結果をもとに体育の授業改善を行い、運動の日常化につながる授業を実施する。	4	4	東京学芸大学や日本スポーツ協会と連携し、親子で一緒に楽しく体を動かすイベントを2年生で行った。投げる力と跳ぶ力を伸ばすための運動遊びプログラムも4年生で実施予定であり、外部機関と連携した活動が充実してきている。ICT機器を活用した課題解決型の体育の授業や体育委員会による体力向上の取組をさらに充実させ、日常的に体を動かすことを楽しめる児童を増やしていく。	4	4	持久走やなわとび等の全校での取組や自分のめあてに沿って楽しく体力の向上を図る体育の授業の充実にも努めている。2学期に東京学芸大学と連携し、投げる力と跳ぶ力を伸ばすための運動遊びプログラムを4年生で実施し、体力向上につながった。児童アンケートでは、「すずみで体を動かすこと」への肯定的評価が93%と高い評価であり、休み時間に元気に校庭で遊ぶ姿も見られる。一方、運動に苦手意識をもつ児童が7%ほどおり、苦手な児童も楽しく運動に取り組める工夫が課題である。		
	東京学芸大学と連携した森林教育や海の移動教室での体験を生かした環境学習等、環境を教材とした学習を行う。	1	3	高学年においては、林間学校や移動教室と関連した学習で、環境に関わる取組を行っている。中・低学年においては、2学期以降に自分事として環境について考え、自分ができることを行っていく主体的な活動を、各学年の発達段階に合わせて充実させていく。環境美化委員会でも、ペットキャップホルルのリサイクルなど、主体的な環境に関する取組が行われており、今後さらに充実させていく。	3	3	「さかなクンと海のSDGs」の学習をきっかけに、6年生が自分たちができることを考え、地域の公園や川の清掃活動に取り組んだ。各学年でも自分ができることを主体的に行う活動に取り組み、児童アンケート「環境問題について自分ができることを考えていますか」の肯定的評価が中間評価86%から89%へと向上した。保護者アンケートでも、「分からない」と回答した保護者が昨年の26%から13%に減少し、肯定的評価も86%と高い評価を得た。積極的な情報発信により「ハチドリプロジェクト」が浸透してきている。		
	特別支援教室専門員、特別支援教育支援員、別室指導支援員、支援ボランティア、SC、SSW等と連携し、個に応じた指導を充実させる。	4		特別支援教育コーディネーター・不登校支援コーディネーターを中心に、SCやSSW、特別支援教室「ひだまり」の教職員、別室指導支援員、エデュケーション・アシスタント、支援ボランティアが連携を密にし、きめ細やかなサポートができていく。授業を進める教員と支援の担当者が連携を密にし、それぞれの役割分担を明確にして、さらに充実した支援が行えるよう努めている。	4	3	特別支援教室「ひだまり」の教職員、特別支援教育支援員、別室指導支援員、学習支援ボランティア、SC、SSW等と連携し、組織的に個に応じた指導を充実させてきた。学芸大学と連携し、学生ボランティアの活用にも力を入れていきたい。1月時点でのべ54人の大学生や留学生の学習ボランティアに協力を得た。教員アンケートでは「個に応じた指導を活性化できた」の肯定的回答が100%となった。引き続き、学習指導と生活指導の両面で個に応じた指導の充実に取り組んでいく。		
	教職員が児童の手本となり、積極的に挨拶をするとともに、保護者・地域とも連携しながら、進んで挨拶する児童を育てる。	4		9月1ヶ月だけで、全校の4分の1以上の児童が、保護者、地域の皆様に挨拶を褒めていただいている。進んで挨拶をする児童が確実に増えている。児童が安心して挨拶できる対象として御協力いただけるように、保護者、地域の皆様に引き続き学校の挨拶の取組について発信していく。高学年児童が積極的に自分から挨拶ができるように、児童の主体的な取組も計画していく。	4	4	代表委員会の挨拶運動や挨拶表彰活動など、高学年児童の主体的な取組を実践している。校外活動ではどの学年も、施設関係の方や地域の方に気持ちのよい挨拶を褒められている。保護者アンケートでは肯定的評価が昨年度89%から92%に増加し、保護者や地域の皆様にも本町小学校の挨拶の取組が浸透してきた。		